

## 愛知大学の短期大学部生を対象とした匿名性が いじめアンケートの回答行動に与える影響の調査

岡田 圭二（経済学部准教授）

**要約：**本研究は、いじめに関するアンケートにおける匿名性が、回答行動にどのような影響を与えるかを検討した。特に、回答場所、回収方法、名前の記入が、いじめアンケートに正直に答えることに与える影響を検討した。質問紙法による調査の結果、名前を記入しないことがいじめアンケートに正直に答えることにつながったことが示唆された。最後にこれらの結果から、いじめアンケートの実施に関する提言、および社会調査法や統計法の教育の必要性に対する提言を行った。

### 1. 序

2012年前半において、滋賀県大津市における中学生の自殺が大きな関心を集めるニュースとなっている。自殺の原因として同級生によるいじめが疑われ、学校内において、いじめに関するアンケートが行われたという報道がある。多くの学生は、学校生活のなかで複数のいじめに関するアンケートを受けてきたのではないかと推測される。このいじめに関するアンケートはどのように行われ、その回答者はどのようなことを感じ、そのことは回答行動や回答内容にどのような影響をあたえているのであろうか。学校内でのいじめという問題は、適切で配慮ある回答環境や回収環境を用意しなければ、適切な回答にならないことは想像に難くない（匿名性と回答行動について、岡田・龍（2011）を参考）。例えば、となりの席の学生の回答内容が見えるような環境、回収の際に自分の回答が誰かに見られてしまうような回収方法であった場合に、回答者は適切な回答を行うだろうか。

そこで本研究では、いじめに関するアン

ケートにおいて、回答者の匿名性がどのようなものであったのか、さらにそのことが回答にどのような影響をたえるのかについて、愛知大学短期大学部生に調査を行った。調査にあたり、（1）仮説として、アンケートの匿名性が保証されていない場合、回答は不正直なものになりやすい、（2）回収において、誰かに回答内容が見られる可能性がある場合、回答が不正直になりやすいというものを考え、検証してみた。

### 2. 方法

被調査者：愛知大学短期大学部生51名が調査に参加した。平均年齢は、18.5才であった。

日時：2012年7月中旬において調査を実施した。

場所：調査は、愛知県豊橋市にある愛知大学豊橋校舎において行われた。調査は、人間関係論1、ライフプランニング、卒業研究という授業を利用して行われた。

質問内容の構造：質問は、大きく分けて、2つの部分に分けることができた。第1に被調

査者のプロフィールに関する部分であった。この部分において、年齢、社会的身分、被調査者自身の性格に関する主観的評価を尋ねた。第2に、被調査者がこれまでに回答してきたいじめに関するアンケートについて尋ねる部分であった。そこには、(1) いじめの有無、(2) いじめに関するアンケートを回答した経験の有無、(3) 正直に答えたかどうか、(4) 回答の方法、(5) 回収の方法、(6) 回答者の名前を書くかどうか、(7) 回答内容が他の人に見られてしまう不安について、(8) いじめに関するアンケートに対する様々な配慮についてなどについて尋ねた。

手続き：授業中に、配布し、回収する方法によってアンケートを実施した。実施前の教示において、(1) 他の人の用紙を見ないように注意する、(2) 回答が終わったら、四つ折りにする、(3) 回収は、箱に入れてもらう、(4) 回答したくないことについては回答しなくてもよい、同様に回答する義務はないので白紙で提出してもよいと、いう注意をあらかじめした。

### 3. 結果と考察

結果は、小見出しの3点について分析した。回答は、すべてについて回答してあったわけではなく、途中までで回答を止めた解答用紙、一部だけ回答していない回答用紙があった。それらの回答のデータも含めて集計した。

#### 3-1 いじめの有無について

51人の回答中、36人がこれまで通った学校において、いじめがあったと回答していた。

#### 3-2 いじめアンケートの経験

いじめアンケートに回答した経験は、以下の表1のとおりである。小学校の時が一番多い。これは、小学校が6年間であることを考えると、実質的には中学校の時にいじめアンケートが一番多いと考えることができる。

表1 いじめアンケートの平均回答経験数

	小学校	中学校	高校
平均回答経験数	2.14	2.11	0.91

#### 3-3 回答時の匿名性への配慮について：

・回答の場所については、表2のとおりである。小学校、中学校、高校ともに教室において回答がなされている。

表2 いじめアンケートの回答場所の回答数

	小学校	中学校	高校
教室にて	30	30	20
自宅にて	1	0	0
両方あった	0	0	0

#### 3-3 回収時の匿名性への配慮について

・回答の回収方法については、表3のとおりである。小学校、中学校、高校ともに教室の席順の後ろから前に回答した用紙を送る形で集められていることが分かる。ただし、中学校、高校では箱に入れる、郵送といった回収時に被調査者の回答内容が他人の目に触れにくい方法での回収が行われていることが分かる。

表3 いじめアンケートの回収方法の回答数

	小学校	中学校	高校
教室にて後ろから前に集めた	21	18	13
箱にいれた	0	9	5
郵送だった	0	1	0

・名前の記入については、表4のとおりである。小学校、中学校、高校ともに名前を記入しない場合が最も多かった。

表4 いじめアンケートの回収方法の回答数

	小学校	中学校	高校
書いた	3	3	3
書かない	17	21	16
書く場合も書かない場合も両方あった	10	7	3

### 3-4 被調査者の回答内容が漏洩する不安について

・同級生にアンケートの内容が見えてしまうのではないかという不安感について4段階（まったくない、少しあった、まあまああった、かなりあった）にて尋ね結果が、表5である。半数の学生は、過去のいじめアンケートにおいて回答内容が見えてしまう不安感を感じていない。しかし不安感の強弱の違いはあるものの、半数の学生が不安感を感じている。

表5 回答内容が見えてしまう不安感について

	まったくない	すこしあった	まあまああった	かなりあった
回答数	19	13	6	1

注：総回答数は39であった。

・回答中と回収中のどちらにおいて、内容が漏洩する不安を感じたのであろうか。その不安感を7段階にて評価してもらったところ、回答中、回収中ともに平均すると7段階中3.15程度の不安感を感じていたという結果が出た。回答中、回収中のどちらかが強い不安感ということはなかった。

### 3-5 いじめアンケートの実施に関する配慮

いじめアンケートの実施に関する配慮をどの程度求めるかについて、質問をした。それは（1）いじめアンケートの回収は、回答が他人に見えないように注意すべきだと思いますか。（2）いじめアンケートの回答は、回答者の名前を書かないようにすべきだとおもいますか、（3）いじめアンケートの回答は、名前を書くことによって、本当のことが回答しにくくなっていると思いますか、（4）いじめアンケートの回答や回収において、だれの回答かが分からないようにすべきだと思いますか、の4つであった。それらについての賛同の程度の強さを「全くそう思わない、少しそう思う、かなりそう思う、非常に強くそう思う」の4段階にて評価してもらった。表6がその結果である。

（1）の「回収時に回答が他人に見えないようにすべき」という配慮事項へ強い賛同が見られる。また（2）「回答者の名前を書かないようにすべき」という配慮事項には全くそう思わないという意見がある。4つの配慮事項に関して、表6を全体的にみると、匿名性や内容漏洩の不安低減を求める程度が強いと判断できるだろう。

表6 いじめアンケートにおいて配慮すべきことへの賛同の程度の人数

	全く そう 思わ ない	少し そう 思 う	かなり 思 う	非常に 思 う
(1) 回収時に他人に見えないようにすべき	0 (0)	4 (10)	7 (18)	29 (72)
(2) 回答者の名前を書かないようにすべき	3 (7)	16 (40)	8 (20)	15 (38)
(3) 名前を書くことによって、本当のことが回答しにくい	0 (0)	16 (40)	13 (33)	13 (33)
(4) 回答や回収にだれの回答かが分からないようにすべき	2 (5)	12 (30)	9 (23)	18 (45)

注：括弧内はパーセンテージ。

・他の学生のアンケートの回答内容が見えてしまった経験は実際にあるのだろうか。そのことを尋ねたところ、この回答項目に回答した38人中2人から他人のアンケートが見えたことがあるとの回答があった。

### 3-6 匿名性が回答行動に与える影響について

匿名性を意識することが回答行動にどのように影響するかを検討するために、同級生に回答内容を知られる不安感の強さの程度（4段階、まったくない、少しあった、まあまああった、かなりあった）が小学校、中学校、高校においていじめアンケートの回答に正直に答えることができたかの程度をクロス集計にて表7に表してみた。その結果。小学校、中学校ともに不安感がかなりあった場合の方がまったくないよりも正直に答えている。ただし、まったくない、すこしあった、まあまああっただけを比較すると不安感の高まりとともに、正直に答える程度は下がっていると見

てもよいだろう。結果パターンがU字型の曲線を描くのは、単に不安感が原因で正直度が上がる下がるという1要因の直線的な関係ではなく、何か隠れた要因が正直度もしくは不安感に影響を及ぼしている可能性がある。小中学校に比較して、高校では、不安感が高まった場合、正直に答える程度が最も低い。

表7 回答を知られる不安感毎の正直に答えることができた平均の評定値

	回答を知られる不安感の程度			
	まったく ない	すこし あった	まあまあ あった	かなり あった
小学校	6.0	5.2	5.5	7.0
中学校	6.2	5.0	5.6	7.0
高校	6.3	5.7	6.5	4.0

注：正直に答えることができたかの程度は、順序尺度であり、本来、平均を算出できない。しかし評定値間の間隔が同じ程度と想定して仮に平均を算出した。数値が高いほど正直に答えることができたとなる。

その他、回答方法、回収方法、名前記入の有無に関してクロス集計を行った。表8がそれらの結果を表している。特徴的な結果パターンを指摘すると、(1) 中学校では自宅の方が正直に答えられていない、(2) 匿名性が高くなると考えられる箱に入れる回収の方が正直に答えられていない、(3) 同様に、郵送の方が正直に答えられていない、(4) 名前を書かない方が正直に答えられている、が挙げられる。

回答場所が自宅であったり、箱へ入れたりすることが匿名性を高め、正直に答えること

へつながると考えたけれども、結果はこの考えを支持するものではなかった。ただし、無記名での回答は正直に答えようとする事につながっている。特に高校生になるとその傾向が強い。いじめの発見には、無記名でのアンケートが必要であろう。

表8 回答方法、回収方法、名前記入の有無毎の正直に答えることのできた程度の平均評定値

	回答場所		
	教室	自宅	両方
小学校	5.7	6.0	-
中学校	5.8	4.3	-
高校	6.0	-	-
	回収方法		
	後ろから前に送る	箱	郵送
小学校	6.1	5.3	-
中学校	6.2	5.4	3.0
高校	6.2	5.8	-
	名前の記入		
	名前を書く	名前を書かない	両方
小学校	6.0	6.1	5.7
中学校	5.7	5.9	6.0
高校	5.0	6.5	4.0

注：正直に答えることができたかの程度は、順序尺度であり、本来、平均を算出できない。しかし評定値間の間隔が同じ程度と想定して仮に平均を算出した。-は対象となる回答がなかったことを表している。数値が高いほど正直に答えることができたとなる。

### 3-7 結果のまとめと応用

#### ・結果のまとめ

多くの学生が小学校、中学校、高校にお

いていじめに関するアンケートに回答している。そし回答の匿名性に高低はあるものの疑義や不安を感じ、そのことが回答行動に影響していることが分かった。すると、精度の高い調査を行うためには、回答の匿名性を高めることは有効だと考えられる。

#### ・応用と提言

社会調査法や心理実験の授業経験から次のようなことを提案したい。(1)調査実施時に、回答の回収方法を匿名性の高い方法にすることを教示する。例えば、「封筒に入れる」、封筒の用意が費用等から難しければ四つ折りにしてから回収する、箱に入れる形で回収するなどが考えられる。

(2) おなじく匿名性を高める観点から、回答を自由記述させるのではなく、選択式の回答にした方がよい。特にいじめ、性体験、恋愛などプライバシー保護を特に重視しなければならない調査では、文字の形等から個人が特定されるという不安感が回答行動や回答内容をゆがめる可能性がある。(3) 解答用紙の処理がどのようになるかを調査開始時に明確に指示する。例えば「本調査のデータは、研究のために用い、データを集計したならば、解答用紙はすぐにシュレッダー等で廃棄処理します」という教示をすることも被調査者の不安を下げる効果があるだろう。ただし、廃棄処理が不適切である場合もあるため、調査対象により適切な処理を検討し、実行すべきだろう。

また、回答にあたり、正直に答えることが躊躇される場合に利用できる技法がある。レイ(2003)は、二択の答えとなる質問(「はい」、

「いいえ」) に対して、被調査者がコイン投げをして表が出たら、二択の回答に必ず「はい」と答え、裏が出た場合には正直に答えるという方法を用いて、回答率を計算する方法を紹介している(レイ 2003 p.234、「(3) 答えにくい質問のための特別な技法」を参照)。この技法は、いじめアンケートにおいて利用できる可能性がある。

最後に、私見を述べさせていただく。自分自身が小中高校生だったときに、一度もいじめに関するアンケートを受けたことがなかった。今回、調査を行って、いじめアンケートがこれだけ一般的に行われていることに驚きを覚えた。それだけに、いじめアンケートを実施する教員や学校組織に、社会調査に関する教養や経験が必要とされているのではないだろうか。2012年の前期に愛知大学の名古屋校舎にて60名近くの教職課程をとっている学生に対して「教育問題研究1」という授業を通じて、社会調査の方法を講義、実習した。その授業経験からいうと、学生が社会調査法、アンケート作成法、統計処理に関する知識、経験を豊富にもっているとは言い難い。教育の現場において、各種アンケートを実施する、アンケート結果の利用が多いことを念頭におくと、社会調査法や統計の教育の重要性が意識される。

## 5. 引用文献

岡田圭二・龍昌治 (2011) クリッカーによる授業内アンケート - 匿名性に注目して - 愛知大学短期大学部研究論集 (34), 1-9.

レイ, W. J. (著) 岡田圭二 (訳) (2003) エンサイクロペディア心理学研究法 北大路書房